

## 在メキシコ日本国大使館における勤務について

野本英絵<sup>†</sup> (農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課  
愛玩動物用飼料対策班)



## 1 はじめに

この雑誌を読まれる多くの方々にとって、大使館はあまりなじみがないかと思う。また、メキシコについてもタコス、テキーラ、マリアッチ(ツバの広い帽子を被ってギターを持った演奏家たち)といったイメージかと思う。私は農林水産省に勤務しているが、2020年7月から2023年8月まで外務省に出向し、在メキシコ日本国大使館で勤務した。本投稿では、大使館における業務、メキシコにおける家畜衛生及び生活について述べたい。なお、私の大使館及びメキシコにおける勤務は3年程度であり、本投稿はあくまで私見に基づく個人的なものであることを予めご了承ください。メキシコと日本の繋がりを織り交ぜつつ書かせていただいたので、気軽に楽しんで読んでいただければうれしい。

## 2 大使館における業務について

そもそも大使館は何をしているところなのかと思われる方も多いと思う。大使館は総領事館、政府代表部などを含めた在外公館の一種であり、在外公館は世界各国に約200以上ある。他国と外交を行う重要な拠点であり、在外公館は邦人援護活動、日本企業支援、広報文化活動、途上国における政府開発援助などを行っている。例えば、海外で事故やテロに巻き込まれた日本人を大使館が保護したといったニュースをみたことがあると思うが、そういった業務も在外公館の重要な業務の一つである。

私が赴任したメキシコ大使館には経済班、政務班、広報文化班、領事部等があり、私は経済班に所属していた。経済班は、簡単にいえばミニ霞が関のような感じで、私のように外務省以外の省庁から出向してきた者が多く所属しており、メキシコ政府との窓口、メキシコにおける政策等の情報収集及び日本企業支援、政府開発援助などを行っていた。それぞれが担当する分野を持ち、私は

主に農林水産分野、保健衛生分野、科学技術分野、(独)国際協力機構(JICA)関連業務などを担当した。

実はメキシコ大使館には農林水産省職員が長年出向しており、私は十三代目、初の女性出向者と聞いている。家畜衛生分野について調べてみると日本とメキシコにおける繋がりが40年以上前からあったことに驚いた。1981年から1987年までメキシコにおける家畜衛生の改善を図り、もって畜産振興に資することを目的とし、家畜衛生センターにおける豚熱GPワクチンの試作製造及び検定技術の確立等の支援を実施した「メキシコ家畜衛生センター計画」や2001年から2006年まで畜産が主要産地であるハリスコ州中央診断研究所に対して家畜伝染病の基礎的な診断体制及び診断技術の改善等を支援した「メキシコ・ハリスコ州家畜衛生診断技術向上計画」といった二国間協力があった。「メキシコ家畜衛生センター計画」の資料を読み解くとメキシコにおける慢性的経済危機、政府機関組織の縮小、人材流出、メキシコ大地震といった困難があったことが窺えた。一方で、「メキシコ・ハリスコ州家畜衛生診断技術向上計画」では、メキシコ側が負担する活動資金の多くを公的なプログラム等から確保するとともに、カウンターパートの定着及び増員がなされ、プロジェクト目標がしっかりと達成されていた。現在、メキシコは口蹄疫、豚熱、牛肺疫、アフリカ馬疫、小反芻獣疫の清浄国、及びBSEのリスクの無視できる国のステータスを維持しており、日本向けに牛肉、豚肉を輸出している。メキシコ家畜衛生当局の幹部に会った際に「日本が豚熱の清浄性を認め、豚肉の輸出ができたとき、とてもうれしかった」とおっしゃっていたことが印象的であった。また、ビジャロボス前農業・農村開発省大臣はJICAの元研修生ということもあり親日・知日で、後述する日本産精米の輸出解禁ワークショップにもご出席いただいた。有難いことにこういった過去からの縁が私の業務を支えてくれた。

私が赴任している間、幸い家畜衛生分野において大きな問題は起こらなかったため、獣医師として活躍する場

<sup>†</sup> 連絡責任者：野本英絵 (農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課 愛玩動物用飼料対策班)

〒100-8950 千代田区霞が関1-2-1 ☎ 03-3502-8111 (代表) (内線：4546) FAX 03-3502-8279

E-mail : hanae\_nomoto550@maff.go.jp

面はあまりなかったが、メキシコ政府の政策等の情報収集の一つとして家畜衛生分野の情報収集を行ったり、日本企業支援のなかで日本からメキシコに輸入される牛肉の輸入に関して、事業者の相談に乗ったり、メキシコ政府と調整を行うことや動物の輸出入について相談を受けることはあった。

### 3 大使館における私の担当業務について

ここからは、家畜衛生の分野ではないが私の担当した業務について、一部であるが紹介したい。

#### (1) 日本産精米の輸出解禁

あまりイメージはないかもしれないが、首都であるメキシコ・シティには多くの日本食レストランがある。日本人が経営したり、日本人の料理人が厨房に立っていたりする本格的な日本食レストランやそういったレストランで修行して独立したメキシコ人による高級なお寿司屋さんもあった。また、すき家もメキシコ・シティを中心に展開しており、牛丼やカレーが食べられた。さらに、メキシコのクリアカンには醸造所があり「NAMI」というブランドで純米、純米吟醸、純米大吟醸の3種類の日本酒が作られ、メキシコの高級デパートで購入したり日本食レストランで飲んだりすることができた。しかし、これらの日本食・日本酒に使われる精米は主に米国カリフォルニア産やウルグアイ産であり、日本からの精米の輸入はメキシコへの侵入を警戒する病害虫が日本で発生していることを理由に禁止されていた。農林水産省は、産地等からの要望を踏まえ、2020年からメキシコの植物検疫当局との技術的協議を重ね、2023年3月17日、日本産精米の輸出が可能となった。通常、検疫協議は年単位で進むため、約3年の協議で輸出解禁できたことは、日メキシコ両国の植物検疫当局の努力も大きかったと思う。私は当局間の技術的協議がスムーズに進むようにサポートした。さらに輸出解禁後には日本産精米がメキシコに到着することになるが、解禁直後の輸入時は通関や検疫においてトラブルが発生する可能性が高いため、無事にメキシコに届くよう事業者及びメキシコ植物検疫当局と調整を行った。さらに、輸出解禁直後、在メキシコ日本国大使館、農林水産省、及びJETROの共催で「メキシコ向け日本産精米輸出解禁ワークショップ」を開催した。このイベントには、メキシコ国内の食品卸、小売り事業者、レストラン関係者等約100名が参加し、輸出解禁についての説明や日本産精米とカリフォルニア産精米それぞれで作ったおにぎりの食べ比べが行われた。実際、おにぎりを比べてみると、日本産精米はカリフォルニア産に比べて甘みを感じ、冷めても色が変わらなかった（カリフォルニア産精米は少し茶色くなっていた）。その後、日本食レストランでは日本産精米を導入

しており、すき家も提供する米を全て日本産に切り替えた。われわれも日本でタコスを食べるときに「このトルティーヤは本場メキシコから輸入したとうもろこし粉を使っていて」と聞けばなんだかうれしくなるように、海外で食べられる日本食に日本産精米が用いられ、現地で喜んでいただければと思う。

#### (2) メキシコの農林水産業

農林水産業に関する情報収集も業務の一つであったので、紹介したい。

メキシコは日本の約5倍の国土を持つ。農用地面積は日本の21倍にもなり、特徴によって大きく北部、中央、南部の3つに分けることができる。北部は、乾燥地・半乾燥地で砂漠地帯が多く、耕種農業には灌漑が欠かせない。水利投資をすれば広い農地を持つことができるため、企業的な大規模経営体が多い。畜産、とうもろこし、トマトの生産が盛んである。中央は、緯度としては熱帯地域だが、高地であるため温暖で湿潤であり、メキシコ・シティの北西に位置するバヒオ地域には、肥沃な農地が広がる一方で中山間地もあり、複雑な地形と多様な農業形態を有する。畜産、さとうきび、果実、アボカドの生産が盛んである。南部は熱帯湿潤な気候で、小規模農家による天水農業を主体としたコーヒー、カカオ等の永年性作物の生産が盛んである。さらに、ユカタン半島やメキシコ湾岸ではヤシ油の生産が盛んである。また、メキシコには南北アメリカ大陸最古のワイナリーであるカサ・マデロがあり、このワイナリーのワインは日本でも購入することができる。加えて、米国と国境を接するバハ・カリフォルニア州はワインでも有名である。

メキシコにとって日本は農林水産物の輸出先国第2位（日本にとって輸入先国第16位）という重要な市場であり、牛肉、豚肉、アボカド、アスパラガス、マンゴー、テキーラなどが輸出されている。例えば、アボカドはスーパーでも見かけるかと思う。他にもメキシコは日本で消費されているかぼちゃの輸出先国であり、1980年代に日本からかぼちゃの種が導入され、現在、生産される品種は日本市場に合わせて採用されている。さらに日本市場のかぼちゃ需要が冬至に合わせて年末に高まることから、その生産と収穫は夏から秋にかけて行われることが多い。

メキシコは2005年以降、農林水産物の貿易収支は黒字に転じており、さらなる輸出拡大に力を入れているが、輸出先国第1位の米国が輸出額の約81%を占めているため、大きなウェイトを占めている。このため、近年では輸出先の多角化も推進していた。

#### (3) 医療機材供与を通じた保健システム強化計画 (UNOPS 連携)

私が赴任した時期、世界中で新型コロナウイルス感染

症が猛威を振るっていた。メキシコと日本の人口は共に1億2,000万人程度であるが、2020年10月のメキシコにおける新型コロナウイルス感染症の1日当たりの新規感染者数は3,000～6,000人台で推移しており、累計感染者数は80万人以上、累計死者数は8万人以上であり、保健・医療体制の強化が喫緊の課題となっていた。(なお、同じ時期、日本での累計感染者数は9万5,000人程度、累計死者数は1,700人程度であった。)このため、日本政府は、国際連合プロジェクトサービス機関(UNOPS)と連携してメキシコに対し医療関連機材を供与することを通じて、感染症対策及び保健・医療体制の強化を支援することとし、私はUNOPS、メキシコ政府と協力して、本プロジェクトに取り組んだ。具体的には、メキシコ全国8州12の病院に新しい医療機器(病院用ベッドや乳児用保育器、心電図モニターなど約500点)や救急車(14台)が届けられ、医療機器及び救急車の使用方法とメンテナンスについて、800人以上の医療関係者に技術支援とトレーニングを提供し、これによって約180万人に対する医療サービスの向上に貢献した。特に、新しい医療機器が供与されても、使い方がわからなければ活用できないため、技術支援やトレーニングを行ったことで、速やかに医療機器を使うことができたことはとても大きかった。また、供与した医療機器・救急車には「COLABORACIÓN DEL PUEBLO DE JAPÓN(日本国民の協力)」と表示されていたため、救急車を見かけたという一般のメキシコ人から感謝のメールが大使館宛に届いたことがあった。日本国内の医療体制も厳しい状況ではあったが、新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後もこれらの医療機器・救急車がメキシコにおいて長く使われ、多くの人々の命を救ってくれることを願っている。

#### 4 メキシコにおける家畜衛生について

メキシコにおける家畜衛生体制についても説明したい。メキシコは農業・農村開発省(SADER)の下部組織である全国農業食料衛生無害性品質サービス機構(SENASICA)に動物衛生総局、農産水産食品安全総局、植物防疫総局などといった局があり、動物衛生、植物防疫、水産防疫、水際検疫、動物用医薬品及び飼料を担っている。先にも述べたようにメキシコは口蹄疫、豚熱、牛肺疫、アフリカ馬疫、小反芻獣疫の清浄国、及びBSEのリスクの無視できる国であり、公的な獣医師は5,000人以上いるとされている。また、TIF(el Tipo Inspección Federal/the Federal Inspection Type)という制度がある。当該制度の対象はと畜場及び食肉加工施設であり、これらの施設では、SENASICAが認定した獣医師が家畜の健康状態を確認し、食肉に消費者の健康を害する可能性のある汚染物質が含まれていないことを確認しており、HACCPシステムを採用している。2024年8月時点で、

440のTIF認証施設があり、そのうち146施設が米国、日本、カナダ、中国など62カ国に輸出している。水際検疫に関しては、OISA(las Oficinas de Inspección de Sanidad Agropecuaria/the Offices of Agriculture and Livestock Health Inspection)が動植物検疫を担っており、約1,600名の検疫官及び約80頭の検疫探知犬が活躍している。日本と同じようにホリデーシーズン前には政府HPで水際検疫について広報も行っている。

また、狂犬病に関して、メキシコは2019年にWHOの「No dog-mediated human rabies and no dog rabies」のステータスを取得している。公衆衛生上の最優先事項とされており、3月には5日間程度の全国犬猫狂犬病予防デーがあり、犬猫にワクチン接種するように広報している。一方で、吸血コウモリが媒介する牛などの家畜における狂犬病は撲滅できておらず、2025年1月時点で32州中26州が「コントロール」というステータスであり、SANSEICAは予防と管理のための全国キャンペーンを展開している。

なお、8月17日は1853年にアメリカ大陸で最初の獣医学校が設立された日であり、メキシコでは獣医師の日とされている。

#### 5 メキシコにおける生活について

ここからは業務から離れて、メキシコにおける生活を紹介させていただきたい。

##### (1) 治安について

メキシコは危険というイメージかと思う。確かに事件・事故に巻き込まれる可能性は日本より高いが、私が暮らしていたところはメキシコ・シティの中心部だったこともあり、海外において一般的に気をつけるべき点(荷物が盗まれないように気をつける、治安の悪い地域に行かない、夜遅くに出歩かない)といったことをちゃんと守れば、問題はなかった。なお、大麻に関しては、違法であるものの、吸っている人たちを見かけることはあった。通勤経路に大麻合法化のデモ拠点があったため、大麻を吸っている人たちがいたが、声をかけられることがあっても無視して足早に通り返れば絡まれることはなかった(ただし、メキシコで同じような場面に遭遇しても、経路を変えて遠巻きに通り返してほしい)。

##### (2) 食事について

食事に関しても、タコス、ポソレ(大粒の白いとうもろこしが入ったスープ)といったメキシコ料理は美味しかった。モレ(チョコレートと香辛料のソース)は地域やお店によって味が違いがあり、遺跡・コロニアル様式の建造物・伝統料理で有名な観光地であるオアハカで食べたモレは香辛料が強めで、カレーのような味わいだった。



図1 メルカドで販売される鶏肉

また、メキシコではノパルというサボテンを一般的に食す。棘が取られたノパルがスーパーや市場で売られており、茹でて刻んで味付けしたノパルは少し酸味があってさっぱりしており、タコスの付け合わせとしても食べられていた。また、チーズも生産されており、オアハカチーズはクセがなくて日本のさけるチーズに似ていた。なお、先に述べたとおり、日本食については、メキシコ・シティでは日本人が経営する本格的なレストランもありながら、海外でよく見かけるスシロールを出すチェーン店までさまざまあった。ラーメン専門店やカツサンドのお店もできるなど、日本食のなかでも専門店化が進んできていた。このため、醤油やみりんといった調味料、精米、インスタントラーメン、日本のお菓子、ラムネなどの清涼飲料水や乳酸菌飲料は日本食材店で手に入った。その他にも日本から日本酒や焼酎、泡盛といったアルコール飲料、牛肉、ぶり、緑茶が輸出されており、現地のレストランで楽しんだり食材店で購入したりすることができた。普段の食事に関しては、スーパーで食材を買うこともできるが、野菜や果物の品質が安定しておらず、メルカド（市場）で買うほうが新鮮だった（図1）。特にアボカド、マンゴーといった美味しいタイミングで食べたい食材はお店の人の方から「いつ食べるのか？」と聞いてくれ、「1つは今日、4つは1週間以内」などと答えれば、よいタイミングのものを選んでくれた。ライチなどその時期しか食べられない果物などは道路沿いで押し車に乗せて販売していることもあり、見かけたら沢山買い込んでいた。ただ、メキシコの物価は、赴任期間中で大きく変わった。メキシコではインフレが進み、さらに円安の影響で2020年7月には1ペソが5円程度だったが、2023年8月には8.5円程度だった。このため、生活費を円換算で考えると辛かった。また、日本食材に関しては、手に入るものの日本の値段の2~4倍程度の値段であった。

### (3) 年中行事について

メキシコといえば「死者の日」という人もいると思う。



図2 死者の日の仮装

死者の日とはメキシコの重要な文化の一つで、11月1日に子どもの魂、2日に大人の魂が現世に戻ってくるといわれており、メキシコ全土で祝われている。もともとは先住民であるアステカ族の祝祭で現在の8月前半に祝われていたが、カトリックと融合して現在の11月になったといわれている。オフレンダという祭壇をカラベラ（骸骨）、センパスチル（オレンジ色のマリーゴールド）、パベル・デ・ピカド（飾り切りされたカラフルな薄い紙）などで飾り、親族で集まり、故人を偲びながら、楽しく過ごす（図2）。この時期、大使館前の大通りはセンパスチルで飾られ、カフェやパン屋ではパン・デ・ムエルトという死者の骸骨と骨を模した丸いパンが売られている。パン・デ・ムエルトの味はお店によって多少異なるが基本はオレンジピールがほのかに香る甘いパンで、各お店を食べ比べると面白かった。お墓ではセンパスチルやカラフルなお花が飾られ、花びらで絵が作られていたりする。夜になると多くのロウソクが灯り、とても幻想的な雰囲気になる。メキシコ・シティ周辺では、ミスキックという小さな町の死者の日が有名で、死者の日にはその小さな町に大勢の人が集まり、本物のポニーのメリーゴーランドや屋台、出し物でごった返していた。子どもは仮装しており、当時流行っていたイカ・ゲームの仮装をしている子どももいた。また、メキシコでは9月16日の独立記念日も重要な祝日である。長い間、メキシコはスペインの植民地であったが、1810年9月16日にミゲル・イダルゴ神父がドロレスという町で独立宣言を行い、それによって独立運動の始まり、1821年9月27日にメキシコはスペインから独立を達成した。現在、独立記念日の前夜の9月15日夜、大統領府で大統領がメキシコの独立宣言を模倣し、国民に向かって「ビバ・メヒコ！」と叫ぶ。また、町中でメキシコの国旗の色である緑・白・赤の飾りがみられ、この時期にチレス・エン・ノガダという伝統料理が食べられる。この料理は大きなピーマンに似た辛くない唐辛子に、挽肉や野菜を混ぜて炒めたもの詰めて焼き、やや甘いクルミのク

リームソースとザクロを添えた料理であり、唐辛子の緑、クルミソースの白、ザクロの赤でメキシコの国旗を表している。その他にもクリスマスも重要なイベントであり、親族で過ごす。メキシコ人は大体12月中旬からクリスマスが終わるまでは休みを取る傾向があり、メキシコ政府の業務も止まってしまう。それまでに業務を進めないといけないので、11月は業務が忙しい時期であった。

#### (4) COVID-19について

私は、2020年7月にコロナ禍で赴任した。同時期、他国に赴任予定だった者はその国が入国を規制したり、その国行きのフライトがなかったりしたこともあり苦勞していたが、メキシコは入国規制がなかったため、予定どおり赴任することができた。ただ、赴任期間の半分は多少制約のある生活だった。例えば、赴任当初、レストランは店内にお客さんを入れて飲食を提供することがほぼできなかったため、外食は持ち帰りまたは配達だけだった。その後、収容人員割合の規制、営業時間の規制、アルコールの提供可能時間の規制などを経て段階的に規制が緩和された。さらに、ワクチンに関しては、メキシコでは2020年の冬からワクチン接種が始まった。基本的には、住居のある地区ごとにワクチン接種の案内が届き、それぞれ決められた時期に決められた場所でワクチン接種を受けた。私の場合は2021年7月ごろに初めてワクチン接種を受けたが、会場は近未来的で写真映えるため観光地にもなっているヴァスコネロス図書館だった。1バイアル分の人数が1グループになり、医師か看護師(?)から健康状態に問題ないか聞かれ、全員が問題ないと答えると、立った状態で順番にワクチン接種を受けた。その後、しばらく椅子に座って待ち、健康状態に問題がなければ、ワクチン接種証明書を持って帰った。

#### (5) 気候や文化、人柄について

メキシコは北から南まで多様な気候と文化がある。南部のユカタン半島は、カリブ海に面した世界的なリゾート地のカンクンや熱帯雨林、マヤ文明の遺跡がある。北部には全長約650kmのチワワ鉄道があり、途中駅のクリール周辺は夜になると氷点下になり針葉樹が広がっていた。また、西部開拓時代を思わせる雰囲気、グランドキャニオンの4倍といわれる銅峡谷が見どころであった。さらに、パハ・カリフォルニア半島のカリフォルニア湾側のラパスでは、9~10月にアシカの子どもと泳ぐことができ、太平洋側のロス・カボスでは、1~3月に南下してくるクジラをみることができる。メキシコを旅行してみて、メキシコ人の人柄については総じて陽気で親しみやすく、親日的だったと思う。拙いスペイン語であっても、伝えたいことを察してくれ、一人でツアー

に参加すれば、周りの人たちから「どこから来たの?」と声をかけられた。死者の日に、友人と浴衣を着て出かけた際には、子どもも大人も沢山のメキシコ人たちと一緒に写真を撮ってと声をかけられ、私がトイレに行っている間、トイレの外で待っていた友人の前には写真待ちの列ができていたことがあった。また、メキシコには1890年代に日本から入植した方々の子孫である日系メキシコ人がチアパス州で暮らしている。彼らの多くは農業に従事していることもあり、訪問させていただき、最初に入植した方が創立したタフコ農場やマンゴー農園、コーヒーを見せていただいた。家族ぐるみで出迎えてくれた優しさは忘れられない。

## 6 さ い ご に

日本食レストラン関係者の方々には、慣習が異なる国で食材もなかなか揃わないなか、問題を解決し、長年、メキシコでレストランを続けてこられ、「この仕事が好きだ」とおっしゃる姿がとても眩しかった。また、日系メキシコ人の方々について、約130年前にメキシコに移住し、さまざまな歴史的な激動のなかを地域に溶け込み、生活を続けている姿を尊敬している。さらに、メキシコにおいて日々心の支えとなったのは、やはり大使館やJICAで共に働いた方々だった。現地職員の方々、同じ時期にメキシコに赴任した職員とは、仕事やプライベートなどさまざまな場面で大変お世話になった。

今後大使館で働くことになるかもしれない方々にとって、大使館における業務は、今までに経験したことのない業務が大部分を占めることになると思う。また、他国の政府と一対一で深く仕事をする事で日本について新たな視点でみることができるようになると思う。日本以外の国での生活は不便なこともあると思うし、メキシコの生活も日本に比べればやや曖昧だったり、よくも悪くも適当だったり、設備に不具合があることもあった。しかし、おそらく日本に比べればどこの国も同じだと思うし、当時は困ったりもしたが、振り返ると面白かったと思える。なかなかできない経験なので、チャンスがあればぜひ挑戦していただきたいと思うし、そこで得られた経験や人間関係は今後も大きな財産になると思う。私の場合は、メキシコにおける業務と生活は、私の価値観や何を大切にしたいかをより明確にしてくれたと思う。日本が平和であることの有難さや農林水産省でも大使館でもさまざまな苦勞はあるが、自分は農林水産関係の業務が好きなのだ気がつけたことは大きかった。

最後に、大使館で働くチャンスを与えてくださり、いろいろなアドバイスや激励とともに送り出してくれた農林水産省の方々、遠くから連絡をくれた友人、同じ時期に赴任し支えあった同期、先がみえないコロナ禍で心配しながらも送り出してくれた家族に感謝を伝えたい。